

差海の「神事華」 —— 神社の祭りにおける「祭礼」の意味 ——

鈴木 岩 弓*

On the JINJIBANA festival at Sashimi, Shimane Prefecture
—— Festivity in the Shinto Festival ——

Iwayumi SUZUKI

I. はじめに

祭りはその構成上、相反する二つの側面を持つことが、これまでの祭り研究の成果の一つとして再三指摘されてきた。例えば藺田稔の「祭儀と祝祭」、桜井徳太郎の「神事と祭事」などの用語がそれである。

藺田の場合は、イギリスの人類学者である E. Leach があの刺激に満ちた「時間と付け鼻」において、祭り進行上の時間的局面を形式性 (formality) - 役割転倒性 (role-reversal) - 仮装性 (masquerade) に分けて設定したことを受け、次の二側面から祭りが構成されるものとした¹⁾。それはまず祭りにおける社会行動のうち、日常に内在する規律を極端なほど厳密に強調した行為を通して日常性を超える方式を通じて実現される「祭儀 (ritual)」である。これはいわば形式の強調による俗から聖へのコミュニケーションがなされる側面で、神社神道における潔斎と祭式、仏教諸派における精進と会式、カトリック教会における戒律と典礼などがその具体例とされる。またこ

れに対するのが、逆に日常の規律を逆転する破戒行為に徹して日常性を突破する方式を通じて実現される「祝祭 (festivity)」である。こちらの場合は演技による聖から俗へのコミュニケーションがなされる側面で、歌舞や演技・競争といった形をとるものとされる。そしてこれら相反する要素が有機的に相乗作用をもたらすところに、祭りの超越的な位相の表象が成立するものとしている。

桜井の場合は、藺田に比べいささか印象論的な感が免れないが、そのいうところはほぼ同様で、「祭りには、静肅な神々しい『神事』と、華やかな部分から成っている『祭事』、この二つの側面から成っている。一方だけを見ることによってこれが祭りである、というふうに速断してはいけないのではないかと考えているわけです²⁾」と述べている。

祭りをストーリーを持った一つのドラマとして見る視点は必ずしも新しいものとはいえないが、以上のように、そこに象徴されている意味に着目して祭りの構成を考察する立場が始まったのは、わが国では1970年代に入ってからのことと思われる³⁾。

本稿では、そのような祭りの一般理論を参

* 島根大学教育学部地域教育文化研究室(社会学)

考にしながら、特に神社の祭りにおける祝祭部・祭事部に焦点を当ててその実態を把握し、その意味を考えてみたい。ただしここでの目的は一般理論の考察に主眼をおくのではなく、あくまで一つの神社の祭りに関する事例研究を目指しているため、徒らな抽象化を避ける意味からも、祭りの二側面をもたらす方式を、実態に即して「神事」と「祭礼」という用語⁴⁾でまとめ、仮りに次のように定義しておく。

「神事」：神職を中心にして祭りの場に神の臨場を仰ぎ、その前で神に仕える行事。

「祭礼」：神社を祀る一般の人々が「神事」に際してこれに参与し、あるいはこれを祝って行なう行事。

「祭礼」が「神事」を喰ってしまうことはしばしば見られる現象である。その結果として、「神事」としての正式名称よりも、「祭礼」時の奉納物の名称やかけ声にちなんだ通称が一人歩きしていることは珍しいことではない⁵⁾。本稿で取り上げようとする「神事華」^{ジンジバ⁶⁾}もそのような事例の一つである。この祭りは、島根県簸川郡湖陵町の差海区で毎年10月に行われている、氏神である佐志武神社の秋祭りであるが、そもそも祭りの名称である「神事華」は、この祭りの際に氏子によって奉納される華の名称である。つまり祭りの際の奉納物の名称が、祭りの代名詞となっているのである。

この華は割った竹を70本ほど用いて、高さ5メートル、直径5メートルほどの傘のように作り、傘の骨にあたる竹にそれぞれ15個の紙で作ったハナをつけたものである。現在祭りの際にこのような形態の華を奉納する所は、県内の神社に限って見ても90余りあり、さらに以前まで行なっていたとする所も含めると160社にのぼるとい⁷⁾う。このことをまとめた山

口覚の論考によれば、その呼び名に関しては、出雲・石見全域にわたって「祭り花」とするところが多く、その他「花傘」、「花鉾」などがある。ここで扱う神事華の名称は、出雲市・平田市の多くと簸川郡の湖陵町・多伎町に限られたものであるといわれる。

本稿においては、この祭りの「祭礼」部を構成している華に着目し、地区の人々によりそれが準備されていく過程をまず記述し、これを通じて祭りにおける神事華奉納の意味を若干考察したい。

II. 差海区の概要

湖陵町は出雲市の西隣りに位置する、戸数1637、人口5,954の町である(1988年8月末現在)。町内は行政区として畑村、常楽寺、三部、二部、大池、板津そして差海の7区に分けられており、それぞれの中が更に数戸から数十戸単位の「部落」(=自治会)が複数集まって構成されている。

本稿で対象とする差海区は16部落からなり、東を神西湖、西を日本海に挟まれた町の北端に位置している。地区の中央部を、近世に開削された十間川が神西湖より西進して日本海に注いでおり、湖に沿って国道9号線が南北に走っている。またその地形は、海岸線にほぼ平行して砂丘が形成され、海岸よりある稜線から東側へ向けて緩やかに傾斜している。

この区は、明治22年に板津村と大池村と合併して神門郡西浜村の大字となるまでの間、近世以来一貫して差海村と呼ばれていた。ここがいつごろ開かれたものかは定かではないが、氏神である佐志武神社が『出雲國風土記』に出て来ることから、歴史的には少なくとも八世紀初め頃まで遡ることが可能と思われる。

「月夜でも焼ける」というたとえ話が残り

れているように、区一帯は水の便が悪く、古
来農地にはあまり適していない。村の地味に
関して、明治18年に出された神門郡差海村の
『村誌』では以下のようにある。⁸⁾

白沙十分ノ九赤土十分ノ一ニシテ其質稍
悪稲米及桑茶ニ適ズ時々旱ニ苦ム

そのためこの地の農業では水田による稲作
は望めず、生産性の低い砂丘農業が行なわれ
ていたにすぎなかったものと思われる。とす
ると人々は、地の利から海へ生活の糧を求め
ていたのであろうか。ところが必ずしもそう
ばかりではなかったことを、『村誌』は以下の
ように示している。

農ヲ業トスル者	六拾五戸
工ヲ業トスル者	七戸
商ヲ業トスル者	七拾二戸
漁狩ヲ業トスル者	百戸
女縫職ヲ業トスル者	五拾三人

このうち漁業従業者が多いことはうなずける
が、「商ヲ業トスル者」の数が農業以上に多い
ことが注目されよう。これがいわゆる「西浜
商人」と呼ばれる、行商などの出稼ぎの人々
のことである。三原亮によると、この地から
村外へ働きに出るようになった原因は、恵ま
れない自然環境と、高い人口密度にあったと
いう。⁹⁾そしてかかる就業形態は、近世から少
なくとも報告のあった戦前まで見られたこと
とされ、差海区のいわば地域特性と考えるこ
とが出来ものと思われる。その具体的内容
は、鮮魚などの日帰り行商から始まり、長期
宿泊の呉服商、住み込みの下男・下女奉公、
紡績工場や鉱山の労働者などといった形で、
県内はもちろん西日本各地からアメリカなど
の海外にまでその足跡が残されているという。

以上のことから明らかなように、この地は、
地味の良くないことも手伝って、農業よりも

むしろ漁業や出稼ぎなどが盛んな所であつた
と考えることができよう。

しかし高度成長期以降になると、漁港に恵
まれないために近代化が遅れていた漁業から
も離れ、若者を中心に都会へ出て定着する人
が多くなった。その背景には、もともと土地
を離れて生活の糧を得ることに慣れていたこ
の土地の人々の特性も多分に作用していたと
思われる。しかし近頃ではそのような人々の
停年後のUターン現象も認められるようにな
り、地区内では老人、とりわけ独居老人の割
合が高くなっている。

これに対し区外へ転出せずに地域内に居住
する人々の生活も、昭和41年に国道9号線が
開通して以来大きく変化し、若者の農業・漁
業離れが顕著になり、職種の多様化や勤務地
の広域化が見られるようになった。また第二
種兼業化した農業も、砂丘地帯を利用した養
豚などへと質的転換が計られている。

近年、同じ差海区内であっても浜に近い部
落から、9号線沿いの便の良い石谷方面への
人口移動が見られるようになっており、これ
までの伝統的なコミュニケーションのまとまり
が、共同性の上からのみならず、地域性の
上からも崩れだしている点を指摘する声も聞
かれる。

この地区の宗教的特性としては、出雲部で
ありながら、いわゆる「真宗地帯」を形成し
ている点があげられる。地区内には観音寺(浄
土真宗本願寺派)があるが、この寺は檀家を
一軒も持っておらず、当該地区の檀那寺は出
雲市などいずれも他地域にある。その主なも
のは出雲市神西沖町にある胎泉寺(真宗大谷
派)、同市塩冶町の長楽寺(浄土真宗本願寺
派)、多伎町久村の西楽寺(浄土真宗本願寺派)
などである。

Ⅲ. 神事華の歴史と運営組織

1. 佐志武神社と神事華

佐志武神社は、『出雲国風土記』に見える「佐志牟社」のことといわれ、祭神として建御雷神、経津主神の二柱を祀っている。神社創建の由緒に関して詳細は不明であるが、社名の由来については、享保2年(1717)に出された『雲陽誌』によると以下のようにある。¹⁰⁾

日本紀曰武甕槌神進て曰豈唯経津主神獨丈夫にして吾は丈夫に非や其辭氣慷慨故に経津主神に配て葦原中國を平しむ此神進て中國に降給ふ故に須々牟社といふ儀か須と佐と音通す是をもつて佐志武神社と号するか

つまり天孫降臨に先立ち、国土禪讓のことを大国主命に伝えるために、先の二神がこの地に進んで降りてこられたことにちなむとするのである。また一方社伝によると、この地へ降りられた二神が、ここから稲佐の浜に向かって進まれたことにちなむともされている。いずれにせよ、この神社の祭神である二神がススムことがサシムに転化して現在の社名となったとする解釈がなされている。

さらにこの神社は、いわゆる「式内社」であったが専任の神職はおらず、近世以来出雲市東神西町にある那売佐神社の社家、武田家

<表-1> 佐志武神社の年中行事

歳旦祭	1月1日
節分祭	2月節分
祈年祭	2月18日
例大祭	10月18日
二の祭	10月19日
新嘗祭	11月18日
紐落祭	11月第三日曜日または土曜日
除夜祭	12月31日

が代々兼務してきた。また明治5年には、差海村の村社となっている。

神社が建つのは、9号線から海岸の方向に650mほど入った小高い丘の上である。以前までは松の巨木がうっそうと繁っていた境内も、近年の松喰い虫の被害を受けて大半が伐採され、すっかり見晴らしが良くなっている。

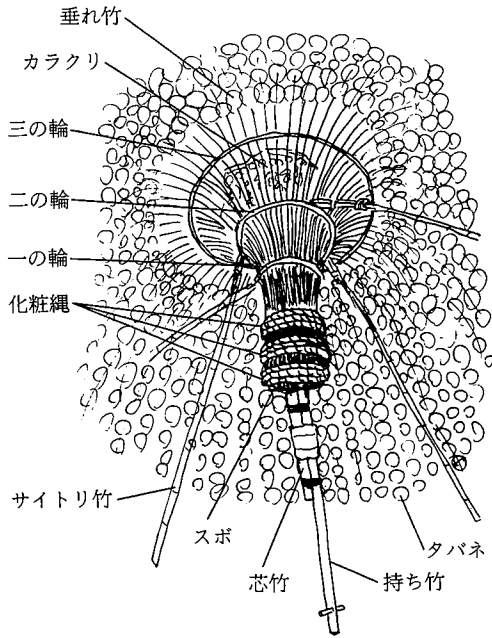
この神社の年間の行事は、<表-1>のようになる。これより明らかなように、本稿で扱う「神事華」という祭りは、神社の側から厳密にいうなら、「例大祭」と「二の祭」を併せて指していることとなる。

佐志武神社の例大祭に、神事華奉納がいつ、いかなる理由から加わるようになったかについては明らかではないが、社伝によると桃山時代からともいわれる。しかし他方昭和39年に実施した藤脇久稔の聞き取り調査に見られるように、「大正初年頃迄は農閑期の益頃、三日間行なわれたものようである。現在では社の神事と合流したため、十月十八、十九日の両日に行なわれている」(傍点は引用者)とする指摘も見られる。この記述通りであるならば、もともと神事華は神社とは無関係になされる行事であったこととなり、当然その意味も現行の「祭礼」としてのそれとは異なることが予想されるわけである。しかし残念ながら、現段階ではその判断を下す用意はない。本稿では現在一般に理解されているような、佐志武神社の祭りとしての「神事華」ということで見て行くこととなる。

近年神事華に見られた変化としては、やはり同じ祭りの際に奉納される神事舞¹²⁾と共に、昭和60年の12月には湖陵町無形文化財に指定されたことがあげられる。またこれと同じ昭和60年から始まった10月末頃の日曜日に開催される町民文化祭「どんとこいまつり」にも

有志で華の参加がなされるようになり、「祭礼」としてではなく、いわばイベントとしての華も見られるようになってきている。

最後に、神事華の構造と各部の名称を示すと、〈図-1〉のようになっている。



〈図-1〉神事華の構造と名称 (略図)

2. 神事華奉納を担う人々

現在祭りで出される華は、奉納の契機から大別して二種見られる。それはまず差海地区の代表として、その年当番に当たった自治会から奉納される「区の華」であり、もう一種は「同級生華」や「有志華」と呼ばれる、自由参加で奉納される華である。

まず「区の華」は、差海区にある16部落を5地区に分け、1年1地区の担当としてローテーションを組み、それぞれの地区が5年に一回当番として奉納している。(〈表-2〉参照) この華が出される以前までは、自由参加の華だけであったため、年によって華の奉納数に偏りが出ており、10本以上も奉納されて

〈表-2〉差海区の部落とその人口構成

地区名	部落名	世帯数	男	女	合計
蛇島	蛇島南	55	70	87	157
	蛇島西	26	44	40	84
	蛇島東	34	59	69	128
川向	川前	48	81	98	179
	川奥西	20	33	32	65
	川奥東	34	55	51	106
地	北組	9	12	18	30
	中組	28	29	49	78
	上空	29	38	51	89
	空口	19	29	36	65
	下空西組部	25	46	47	93
石谷	石谷東	34	68	73	141
	石谷南	60	115	123	238
	石谷西	16	30	36	66
	石谷中	19	42	35	77

(昭和63年8月末現在)

境内にすべてが入りきらずに喧嘩が起こったこともあったといわれる一方、奉納されない年もあったという。そこで「区の華」は、少なくとも毎年1本は必ず奉納されることと、区内の人々がまんべんなくこの祭りに参加できることを目指して昭和50年から始められ、今はその3巡目に当たっている。その名称からも窺えるように、実施当初はいざ知らず、現在ではこの華は差海地区の公的な代表といった意味付けがなされており、祭りに際しては、境内への入場、華を倒す順番などといった場面で、他の華とは一線を画した特別な扱いがなされている。

これに対して自由参加の華のうち「同級生華」は、かつて学年の同じだった人々により出されるものである。現在のところ昭和21年生まれの人々の「賽の目会」、昭和22年生まれの人々の「賽の目会」、昭和29年生まれの人々の「^{フトフサ}太房会」、昭和29年生まれの人々の

「稲穂会」の計三団体からの奉納が知られている。これらの集団のメンバーは、その名の如く実際に学校時代同級生であった人々のみならず、同学年で他地域から差海区に婿に入って来た人々も含まれるが、場合によると区内に居住しているその学年前後の人々も含まれることがある。

また「有志華」といわれる華は、厳密に言うならさらに二種に分けられる。その一つはこれまで例年「職人華」と称して参加していた集団である。これは大工・左官を中心にした職人と呼ばれるような職業集団の人々により構成されていた。しかし近年その様な職業従事者の数が減少したため、その集まりをもとに職種には無関係に、新たな参加希望者を加えた有志の会として発展的解消し、「浜茄子会」を結成して参加している。

さらにこの種の華には、上記の華のようにほぼ毎年コンスタントに出さずとも、同じく有志の話し合いの中からたまたまその年に奉納するといったものが含まれる。昭和62年の場合には、蛇島地区の人々が集まって「蛇島有志」として1本奉納した。これは以前にこの地区が「区の華」を担当して以来、その地区の有志で奉納されるようになったものである。

以上より明らかなように、現在華の奉納を行なう人々は、「区の華」・「同級生華」・「有志華」といった三種の華のいずれかの形をとって奉納していることになる。これを華を出す集団の構成原理の点からいうなら、〈部落という地縁〉・〈学縁を基盤にした地縁〉・〈職縁を基盤にした地縁〉とまとめることが出来ると思われる。その前提には、いずれも差海地区に居住しているという広義の〈地縁〉があるが、神社側から見るとこれがそのまま佐志武神社の氏子という〈社縁〉で

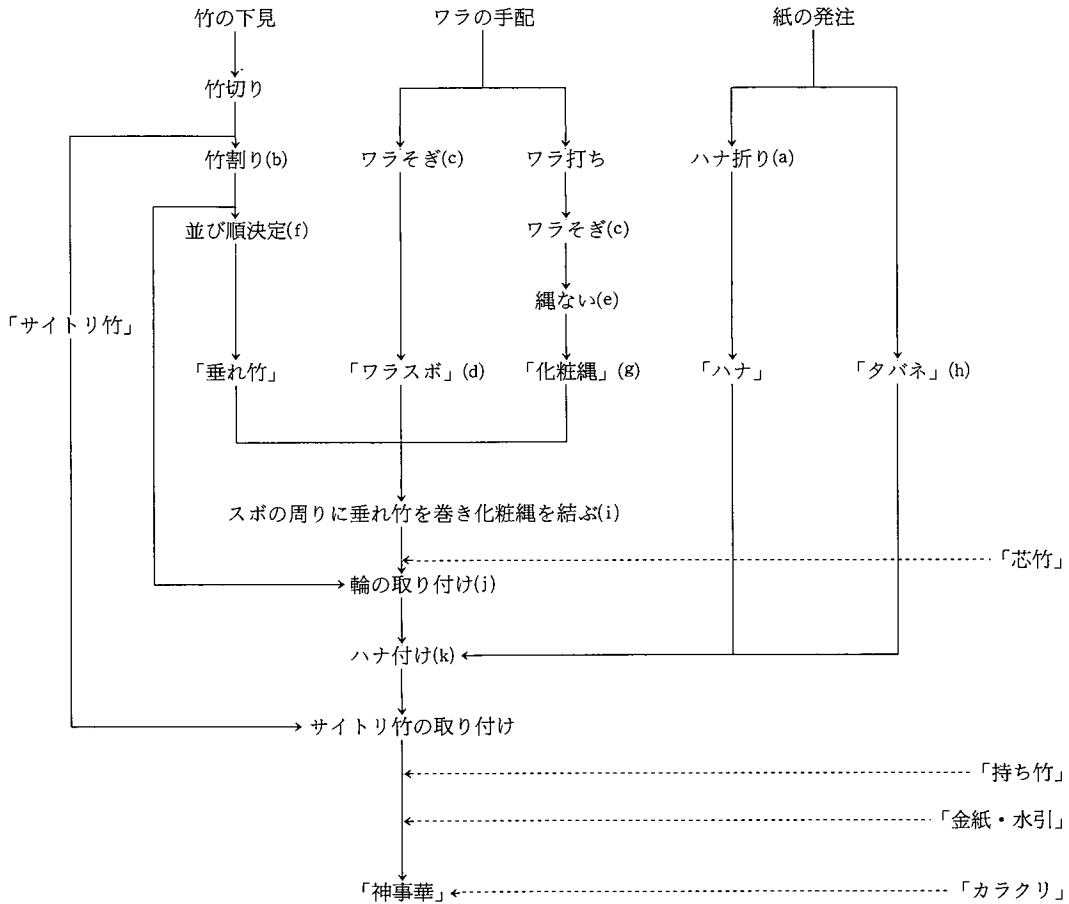
構成されていることになる。

ところがそのように〈社縁〉を背景に奉納されている神事華であるが、その奉納過程を見ていくと、神社との関係が希薄であることが明らかになってくる。この神社の宮司、あるいは氏子総代などといったこの神社の運営に強く関与している人々とは、事前に何の接触もないままに準備が進められ、奉納されているのである。この点が、この祭りにおける華の位置を明確に示すことになる。つまり神事華奉納は、その名に反して「神事」の範疇に入るものではなく、「神事」に華を添える、あくまで「祭礼」に属するものと見なされているわけである。

それでは、自由参加の華の場合はその性格上除くとしても、区の代表、ひいては氏子の代表ともいべき「区の華」はいかなる経緯で奉納されるのであろうか。結論からいうなら、「区の華」奉納に関する運営は、差海区の地方自治組織である「区会」によってなされている。

区会は、差海区の最高議決機関である。まず組織の代表として「区長」がおり、その下に「事務長」、「会計」と5人の「常任委員」がいて、常任委員会を構成する。常任委員は〈表-2〉にあげた5地区から1名出される。そしてこれに常任委員の出た部落を除いた11部落から各1名の「評議委員」が加わって区会を構成している。

まず9月初めまでに、常任委員会がその年の例大祭で「区の華」を出す自治会を、前述のローテーションに照らして確認し、区会に提案する。そして区会でこれが認められると、区長の方から当該部落の会長達に対し、正式に神事華を出してもらおうよう要請することになる。この要請を受けて初めて、会長達は役



＜図－２＞神事華の制作工程

割分担や予定を立て、その年の神事華奉納の担当地区として準備に取り掛かることになる。

即ち、先ほど神事華奉納が＜社縁＞を背景に実施されていることを指摘したが、いま見たようにその運営には、単に信仰レベルの問題だけでなく、住民自治という広い意味の政治レベルの問題も多分に絡んでいるということになる。それが故に、昭和62年の「区の華」には区から7万円の援助金が出ていたのである。

IV. 祭りの準備 — 神事華の制作 —

区からの要請を受けて「区の華」奉納の担

当にあたった地区では、それぞれの地区の人口構成や実働可能時間などに応じて、祭りへ向けての準備を開始する。神事華の制作過程を図示するなら＜図－２＞のようになる。準備内容に関しては、大きな相違は認められないため、以下では昭和62年の「区の華」の準備過程を事例として、材料の手配・材料の加工・華の組立てに分け、ほぼ時間経過の順にその実態を記述することにする。

この年の「区の華」は、ローテーションを組んで以来3回目の当番に当たった、地下地区の前半、北組・中組・上空^{カミソラ}の3部落であった。9月初めに奉納を要請された地区では、

奉納に向けての準備計画を立て、そのための役割分担を行なった。勤め人が多いことから、人手を必要とする準備は、一般に日祭日や夜間を選んで進められることになる。祭りまでの間には、天気によって実施日を変更する可能性を持った町民体育大会なども予定されていたため、代案も併せて考えられた。また主な役職である実行委員長・副実行委員長・会計については、三人の会長で分担されることになった。このうち特に実行委員長宅はハナヤドと呼ばれるが、これはこの家が祭りの頭元的役割を果たすことを意味している。

1. 材料の手配

祭りの予定が立つと、まず神事華を作る材料の手配から始まる。神事華を作る主な材料としては、竹・ワラ・紙があり、その他紙紐・木綿糸・針金・糊・小縄・水引などがあげられる。これらの中では特に、市販されていない竹とワラの入手が準備の要となる。

まずここで用いられる竹は、周囲が1尺近くの3、4年ものの真竹である。地下地区の周りにはそのような竹は生えておらず、均質で曲がっていないものを入手する事は、近頃ではなかなか難しいこととなっている。そのため「竹切り」実施前には、役員達を中心に、使えそうな竹を求めて山手の方面へ下見を行ない、その検討を待って使用する竹を決める。竹の状態のみならず、持ち主の許可の問題もあって、年によっては遠く大原郡のあたりにまで足を伸ばすこともある。今回の場合は、たまたま佐志武神社の宮司も兼務されている出雲市の那売佐神社の宮司家の竹林から分けてもらうことになり、9月27日に「竹切り」を実施した。その際には主に垂れ竹に使用する太い竹を5本、サイトリ竹などに使用する中くらいの竹を10本ほど用意した。

ワラは、打った後に粘りがあり、丈が長いということで、もち米のワラを使用することになっている。しかしそのワラの入手も困難を伴った準備となる。というのはまず、地区内では昔から米は作っていないため、竹と同様、すべて地区外から入手しなければならないからである。またさらに祭りの準備にあたる9月末の時点で、その年の稲刈りが終わって、ワラの使用が可能になっていなければならないという点があげられる。このような制約は、逆にそれだけ候補地を捜す条件が絞られることともなるが、結果として寒冷地から求めることが多くなる。この年の場合は、三瓶山近くの、地区の人の親戚から入手した。

ハナに使う色紙については、色を決めて出雲市の紙問屋に発注する。以前までは、地区の人が裁断していたが、現在では裁断したものを納入してもらっている。

2. 材料の加工

(a) ハナ作り

9月末頃の夜になると、各部落ごとに会長の家などに集まって神事華に付ける紙のハナ作りが行なわれる。1本の垂れ竹にタバネを除いて14個のハナが付くが、垂れ竹の総数が70本ほどになるので、予備も含めて総計1,000個余りを手分けして作ることになる。

ハナの色は金・銀・赤・緑・紺の五色で、紙は、18cm×35.5cmのものが用いられる。ハナ作りの工程を具体的に記すなら以下のようなになるが、適当に分業して行なわれる。

- ① 用紙を縦長に置き、折り目を45作り、山と谷に23ずつ蛇腹に折る。紙の材質によって折り易さに違いがあり、和紙は一般に折りにくいといわれる。
- ② 紙の中央を紙紐で縛る。後で竹に結び易くするために、紐の端は長めにしておく。

- ③ 折った紙の端と端を接着剤でとめ、扇子のように開く。
 - ④ 紙を開く際にシワができるので、ピンセットで紙の形を整える。
 - ⑤ 中央の紐を結んである部分に、ヘソカクシと呼ばれる2×2cm程度の他の色の紙を貼る。この時使われる色はハナの色により替え、金には紺の、銀には緑の、赤には銀の、緑には金の、そして紺には赤のヘソをつける。こうして完成したハナは直径17.5cmになる。
- (b) 竹割り
- 差海公民館前の広場におき、10月10日の朝8時30分から行なわれた。参加者は役員を中心に8人ほどで、この中には竹を割る特殊技能者として、担当地区外の石谷中に住む原英吉氏が含まれていた。これは、竹を上手に割るには技術がいり、地区内でこれができる人がいないために、地区外から依頼してのことであった。事情は他の華でも同様で、氏はこの年、他の区も含めた8本分の竹割りを依頼されており、この日の午後には蛇島の有志華の竹割りに行くことになっていた。
- まず集まった人々は御神酒を飲んでお清めをした後、原氏を中心に以下のような工程で作業を行なった。
- ① 竹の根元側の節から19尺の所でカットし、使用する竹の長さを同じにしておく。
 - ② 竹を四等分するため、まず根元の側の太い切口の周りに紙テープを巻いて竹の周りの長さを計る。次にそのテープを四つ折にして四等分の位置を決め、再度切口に巻き付けて竹の切口面にその位置を印する。
 - ③ 小型のナタを竹に付けた印に当て、木槌で打って割れ目を付ける。90度ずらして同じく木槌で打って割れ目を付ける。
 - ④ 竹の割れた部分に、2枚の板を十字型に組み合わせてはめ込み、手前に引いてこれをクサビのようにして割っていく。節を抜く際のスコン、スコンという音が小気味よく広場に響く。
 - ⑤ 四分の一にした竹をさらに二分の一にする。端にナタを立てて切れ目を入れ、竹を抱え込んで、刃を手前に引くようにして二分する。
 - ⑥ 全部で八分割した竹のうち、半数の4本をさらに二分、また残りの4本は三分する。ただしこの時には竹をすっかり切り離さず、根元から6,70cmほどの部分はくっ付けたまま残しておく。竹の巾は、強い竹の時で3分、普通の時で5分ほどになる。周囲9寸の竹なら16、1尺の竹なら18~20を目安に割る。
 - ⑦ 竹の裏側の節をナタで取る。
 - ⑧ 同じ竹から割ったことがわかるように、竹の裏側にマジックで印をつけておく。これは、竹によって強度が違うので、垂れ竹が均等に垂れ下がるように、使用する竹の並び順を決める便を計るためである。竹は乾燥すると強度が増すといわれ、割られた竹から裏側を上にして日に当てておく。このようにして、この時には全部で5本の竹を割った。
- (c) ワラそぎ
- 祭りがあと一週間に迫った10月11日の午前9時、公民館に地区の老若男女が集まり、一日かけて様々な準備に当たった。
- 集合するとまず御神酒でお清めをし、ワラそぎから始める。これは、使用するワラのアブタなどと呼ばれる茎の周りの柔らかい部分をそぎ落とし、芯の部分だけにする作業である。参加者全員が男女の別無く、公民館前で

思い思いに世間話などをしながらワラの柔らかい部分をそいで取り除いていく。

この時そぐワラには、丈の長いものと短いものの2種ある。前者はスポに、後者は縄に使用するものである。丈の長いワラは入手が困難であるが、スポ用のワラは後述するようにその構造上長くなくてはいけない。しかし縄にするためのワラは、最後にはなってしまうために、長いに越したことはないものの多少短いものでもかまわないという。ただし縄用のワラは、そぐ前に必ずワラ打ちしておかねばならない。これはワラの中の空間を潰すためと、芯を打って柔らかくして縄ないがやり易くするためである。この時は早朝に、ワラ打ち機を持っている他地区の人のところで用意したワラを打たしてもらって来た。ただしスポにするためのワラは、打ってしまうと見栄えが悪くなるため、打たない固いままの状態で使用する。

(d) ワラスポ作り

スポ用のワラは4尺ほどの長いものを用いるが、それは加工の過程で半分に折り返すため、これに使用するワラは50束になる。

縄用のワラと並行して行っていたスポ用のワラそぎは、その量が少ないためすぐに終るが、終わり次第早速公民館前の公園内でスポ作りの準備に取り掛かる。これを作るには力が要することもあって、男だけで行なわれる。まずスポにするワラを一束にまとめ、その中央にロープを回し、建築用の牽引のための機械を使ってしっかりと締める。寸分の隙間もなく締め付けると、ワラの中央を紐で結んで立て、その上半分のワラをげんこつで叩きながら中央より下の方に外側に開くように折り込んでいく。一通り返し終ると、その上から、やはり機械を使って締め、紐で2ヶ所留める。

(e) 縄ない

そいだワラがある程度溜って来ると、男達は縄ないにかかる。普通縄をなう時には、左手の掌の上にワラを置き、その上に置いた右手を前に押し出すようにしてなうのであるが、ここではその逆に、右手を下にして左手を押し出す、「左縄」とすることが特徴である。他の機会にこのようにしてなうのは、注連縄をなう時だけといわれる。しかし現代では、縄をなうこと自体機会がほとんどなく、ない方を知っている人のアドヴァイスを受けながらなっていく。その結果、昼前までに25mほどの縄を2本作り上げた。

これが終る頃までには、スポもすでに来上がっており、午後1時まで昼食休憩となる。

(f) 垂れ竹の並び順決め

昼食後人々が再び公民館に集まり始めると、まず男達数人が、しなり具合を確かめ合いながら、均等に垂れ竹が垂れるように竹の並び方を決める。その際には、竹の裏側につけられた竹の番号が参考になる。いよいよ決まると、紐を互い違いに掛けてまず一番下の部分をつなぐ、次にその一尺ほど上と、そのまた一尺ほど上にさらに同じように紐を掛ける。これにより70本の垂れ竹は、その根元の部分がまとめられた一枚の簾のようになる。

(g) 化粧縄作り

(f)の作業と並行して、男達により午前中に作った2本の縄(25mほど)を使って化粧縄がなわれる。これも左縄となるが、もとの縄が緩まないようにしっかりと握りながらよりあわせて行かねばならず、見ているだけでも力が入る作業である。そのため「ヨイヨイ、ヨイヨイ」とかけ声を掛けて、調子を合わせながらなっていく。もとの縄が長いので、男だけでは間隔が開いてしまい、途中からはワラ

そぎの後片付けをしていた女達も混ざって総出でなう。

この時は途中で、なった縄が緩んでしまったため予定していた以上の時間がかかり、夕方5時近くになって化粧縄は完成した。結局25mの2本の縄を合わせてなったため、出来上がった化粧縄は、約5m縮んで20mほどになった。最後には、バーナーで飛び出たワラを焼き、縄としての体裁を整える。

(h) タバネ作り

ワラそぎの後片付けの済んだ女達は、次に公民館内で垂れ竹の先端に付けるタバネ作りを行なう。作り方は他のハナと同じであるが、使用する紙が、紺の和紙に一部赤・金・銀の色紙を貼ったものを使用する点と、大きさが20cm×34cmである点が異なっている。その結果、折りあげられたハナは模様が入り、しかもその直径が19.5cmと他のハナより大きいものになっている。

3. 華の組み立て

(i) スポ・垂れ竹を化粧縄で結ぶ

この日引き続いて、華の組み立ても一部行なわれる。まず出来上がったスポの周りに、順番を決めて並べた簾状の垂れ竹を巻き、化粧縄で結ぶ。この時にはスポ作りの際にも用いた、牽引の機械を活用し、竹がミシミシと音を立てるくらいしっかりと締め付ける。化粧縄は竹の一番下から約25cm間隔で3ヶ所とめるが、いずれも3回巻いて男結びで結ぶ。

(j) 芯竹の打ち込み

芯竹とする先の尖った杭の、先から1mほどのところに細い縄を巻き、先端に御神酒を掛けてお清めしてからスポの中心に打ち込む。芯竹という名称ではあるが、実際には竹ではなく、地区内の大工が寄贈した皮を剥いだ丸太を使用した。この時は(c)からここまでの工

程を10月11日一日かけて終えたが、地区の人々が老若男女協力しあったにも拘らず、終わったのは日もとつぷりと暮れた7時過ぎであった。出来上がった華はハナヤドへ持って行き、保管される。

(k) 輪の取り付け

これまでの仕上がりでは、垂れ竹は化粧縄で締められた状態で、まっすぐ延びたままであった。そこで次に垂れ竹が傘のように広がって行くように、垂れ竹同士の間隔を広げて竹を外側に開かすことになる。そのために用いられるのが輪である。

祭り前日の10月17日朝の8時に、男ばかり十数人がまず華をハナヤドから、近くの広場を借りた華作り場へ持ってくる。最初に芯竹を、地面に打ち付けた2本の杭の間に縄で固定し、その周りを囲むように脚立の上に板を置いて足場とする。

初めに作る「一の輪」は、一番上の化粧縄から50cmほどの所に巻くが、輪を巻く位置が決まると、その芯にする割った竹を針金で固定し、その上から細い縄を巻いて行く。この時に垂れ竹と垂れ竹の間に縄が幾重にか巻かれ、そのために垂れ竹は外側に向かって反り返り、若干開いた形となる。これと同様にし、渡した板の高さを上げながら、その上に立って「二の輪」・「三の輪」が付けられた時点では、竹の端はほぼ完成時の間隔に縄で結ばれ、すっかり傘状に開くこととなる。

この作業の最中には、他の華を奉納する人も見に立ち寄り、お互いに仕事の進み具合を話し合い、またそれ以外の華の進行状況の噂話などもする。前述のように華の奉納においては、「区の華」を含めて華を奉納する団体相互を統括する組織は存在しないため、地区内ではこのようなパーソナルなコミュニケー

ションによって、その年の参加本数や、それぞれの準備状況などが人々の間に伝えられて行く。

(1) ハナ付け

祭り当日の10月18日朝、地区内の人々が集まって、この日のために折り上げたハナを垂れ竹に結び付ける作業を行なう。これはまず、垂れ竹の一番端に通りタバネをつけることから始まる。これが済むといよいよ五色のハナを付けることになるが、色の順序が決まっており、隣のハナの色は左周りにいうなら「赤—紺—金—緑—銀」となる。従って同じ色のハナは、下から左上方に連なることになる。

そのように結んで行く際には、ある程度明確な分業態勢が取られ、華の内側に立ってハナを竹に結び付けるのは必ず男、ハナを手渡すのは女の仕事であった。冗談を交わしながら和気合々とした中で進められる作業は、これまでの半月間、それぞれの立場から華作りに協力してきた人々の我々意識 (we-feeling) に満ちている。一通り付け終ると、参加者一同で四方八方より眺め、一段落した喜びに浸りながらハナの向きなどの調整を行なう。



<写真-1>ハナ付け (10月18日朝)

(m) 華の完成

ハナ付けの進む傍らで、役員たちが中心になってサイトリ竹を作る。<図-1>で示し

たことから明らかなように、華は重心が上にあって運ぶ際には安定が悪い。そこで下から持ち上げるだけでなく、周りからこれを支えるために付けられるのがこの竹である。これに用いられる竹は、太いところでも直径5cmほどの長さ5m程度のものであるが、その先端から7,80cmのところから縄を巾1mほどギッチリと巻き、その中央を木槌で叩いて割り、折り返して縄で簡単に縛っておく。そしてまず「一の輪」に、4本サイトリ竹が固定される。その際には先ほど結んだ縄をとり、下から垂れ竹の間を通して差込み、輪に掛けるようにして縄で固定する。

それがすむと華を斜めに倒し、「持ち竹」(木製)を取り付ける。これを持ち上げて華を運ぶことになるが、手がかりとして下から30cmほどの所に横木が1本取り付けられている。これは10年前の昭和52年に、この地区が華を奉納した際に地区の人が寄贈したものが用いられた。これはスポの芯竹を打ち込んだ横に並べて、木槌でスポに打ち込む。

これがすむと引続き、斜めにしたまま「二の輪」に残り4本の「サイトリ竹」を取り付ける。これができると先ほど固定していた二本の杭の間に華を固定する。

こうしてほぼ形を整えた華には、後は若干の整備や手直しがなされる。まず糸や針金などで固定している部分に目隠しをする作業である。化粧縄の結び目については、まずその先の部分をハサミで整え、結んだ根元から先にかけて金紙を巻き、紅白の水引きで2ヶ所結ぶ。また前もって打ち込んでいた芯竹と持ち竹の重なっている部分にも同様に金紙を巻き、紅白の水引きで3ヶ所留める。またこれまでの作業で、痛んだ華の交換も同時に行なわれる。

こうしてよいよ作業が終了する頃になると、ハナ折りにせよ、ワラそぎにせよなんらかの形で華作りに参加してきた地区の人々が多数集まって来る。秋の気配を強めてきた地区の一角に、神事華はまさに枯木に花が咲いたようにきらびやかに輝いており、集まった人々は皆これを、地区として責任を果たした安堵と満足感にひたった表情で、口数も少なく遠巻きに見つめる。しかし時間も迫っており、感慨に沈んでばかりもいられず、男達は鉢巻などの配布を受け、それぞれ家へ帰って個人の準備を整えることとなる。

V. 祭りの過程

ちょうど華の最後の仕上げが行なわれている18日午前10時から、神社本殿にて「神事」が執り行われる。これに参加するのは総代・各自治会長など30名ほどである。華を奉納する地区の役員は、準備に追われていることもあって、必ずしも出席しない。

午後1時、神事華を奉納しようとする男たちは、白ハダコ・白腰巻き・白足袋姿で、首に揃いの水色の鉢巻を巻いてハナヤドへ集合する。この時集まったのは、都合で後から参加する人を除いた男20人で、そのうち16人が今述べた装束でやって来た。一同集合すると、ハナヤドの主人である実行委員長から挨拶があり、御神酒でお清めをした後、簡単な酒宴が催される。この時には華を奉納する時に唄われる囃子唄が唄われる。これは木遣り唄とも呼ばれるもので、例えば次のようなものである。

ホ〜ラ〜ハ〜エ〜

[ハーヤツテゴセ〜ヨ〜イヤナ〜]

ヤァ〜鶴が舞います この家の上で

この家繁と あの末永く ヨ〜イトネ〜

[ハ〜ハラレバ ハララノラ]

ハラヨ〜イト〜コ ヨ〜イトコセ]

* [] 内は全員で

歌詞の内容はハナヤドを誉めるものや、おめでたいものを詠ったもので、参加した人々それぞれが唄う順番、唄の順番など全く自由に次々に唄い出し、それに合わせて全員が囃子の部分を唄う。

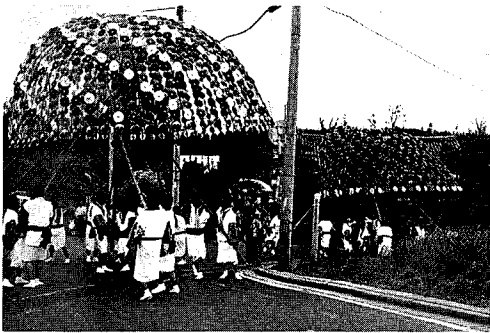
この時上座には、神社境内で神事華の上に取り付けるカラクリが置かれている。これはヤカタ・デコ・本尊さんなどとも呼ばれ、1m50cmほどの木の棒の上に屋形を取り付けた、華のシンボルともいべきものである。屋形の中には、25cmほどの男女一組の木製の人形が入っており、屋形から下がる2本の紐を引くと、回りながら前後に動き、ついたり離れたりする仕掛けになっている。屋形の軒などからは、赤・黄・緑などの派手な糸や布で作った糸鞠などの飾りが、所狭しとぶら下げられているが、これは人形の着物と同様に、地区の女達により作られたものである。このカラクリは、以前この辺りで盛んに見られた若者宿で使われていたものといわれ、宿を担当したことのある古い家に現在も保管してあるものを借りだして使っている。

裏方として10人ほどの女がお酒や料理の世話をするうち、ある程度盛り上がってくると、ハナヤドの玄関先で記念写真を撮り、いよいよ出発となる。「本尊さん」といわれることが示すように、カラクリは神聖なものと観念されており、神社までの道のりはすべてこれが先頭に行く。ハナヤドを出る際もカラクリを先頭に出発し、その後に参加者が続いてまず華作り場まで行く。

華作り場に付くと、白ハダコ姿の男達は1本のサイトリ竹に2人ぐらいづつつき、女達

の振舞うお酒を飲みながら、ここでまた囃子唄をしばらく唄う。特に外で唄う時には、全員で合わせる「ハラヨーイト〜コ ヨ〜イトコセ」の部分で、皆そろって右手を上げ、伸び上がるようにする。こうしていよいよ氣勢が上がってくると、持ち竹を結んでいた縄を解いて、華は神社へと向かう。

その行列はまず、背広姿に水色の鉢巻を首にした役員達の持つカラクリが先導する。カラクリは数十m進むと待機し、その後から「ヨッサ、ヨッサ」のかけ声と共に華が運ばれて来る。華は追い付くとそこで降ろされ、運んで来た男達によりまたしばらく囃子唄が唄われる。



〈写真-2〉華を神社へ運ぶ
写真中央、電柱左のカラクリは後ろの華のもの

以上の経過を何度か繰り返して、華は神社の下まで運ばれる。しかし途中には電線が道の上を横切っていたり、庭木の枝が出ていたりといった障害が随所に見られ、そのたびに華は傾けられたり横に寄ったりして通り抜ける。昔は道が狭かったこともあり、他人の畑に入り込むこともあったといわれるが、それでも「華は天下御免」ということで手を振って認められていたといわれる。

神社下に着いても華はすぐに境内へ上がることはせず、奉納予定の華がすべて揃うまで、

路上で木遣り唄を唄いながら待つのが原則となっている。そのような中、3時頃になると、地区内を回ってきた神事舞の一行が、稚児行列を引き連れて一足先に境内へ入る。この行列に続いて最後の5本目の華も集合し、ここで境内へ上がる順番を決める抽選が、華の代表者により行なわれる。従来一番初めに境内に入るのは「区の華」と決まっているため、この抽選では二番以下の順番を決めることとなる。登る直前になると、男達はそれまで首に巻いていた鉢巻を額にしっかりと結び、服装を正す。

境内へ昇る石段の途中には鳥居があるため、華は石段の向かって右側の斜面を迂回して登ることになる。この時には、鳥居脇の石灯笼の上の部分は取り外され、少しでも通り易くしておく。但しこの時カラクリだけは、石段を登って鳥居をくぐって先導し、境内へはいることとなる。境内への斜面は足場が悪く、不安定な華を支えながら登るのは至難の業である。バランスを崩して華が地面に倒れてしまったなら、華を持っていこうとしている参詣者に折り取られても文句はいえないなどともいわれ、緊張の一瞬となる。サイトリ竹は引いてはならず、必ず押すようにしなければならぬといわれ、男達は必死の形相で支えていく。

苦勞の末境内に登ると、拝殿前にて男達は宮司からお祓いを受ける。そしてそれに引続き、囃子唄の奉納が行なわれる。これが終ると華は、右回りに本殿裏に廻り、華の一番上にカラクリを取り付ける作業にはいる。この時は、高床式の本殿の側に華の頂点を傾け、本殿の上から華の輪の中に一人飛び移ってカラクリをスポの中に突き刺して固定する。この段階を迎え、ようやく神事華は完成した姿

をとることとなる。

このようにして全ての華が準備万端整え、見物客の見守る境内の広場に集まって来ると、再び代表が集まって抽選をし、華を立てる位置を決める。この時は「区の華」も平等に抽選に加わる。場所が決まると、華作り場でしたのと同様に2本の杭を地面に打ち込み、その間に持ち竹を縄で固定する。

これ以後境内は喧噪に包まれる。早速華の下には酒やつまみが運ばれ、男達はこれに手を延ばしながら、囃子唄に興じる。そのときには八方に延ばしたサイトリ竹を、竹を短く切ったササラで叩きながらリズムをとり、またカラクリから垂らされた2本の紐を交互に引いてデコを動かす。男ばかりでなく女たちも、竹を切って作った盃を持つなどして酒や料理を誰彼かまわず振舞い、境内が見物人も含めて一種の集団的沸騰状態に置かれる。この日は夕暮れと共に自然解散となる。

翌10月19日は午後にはハナヤドに集まり、まとまって神社に向かう。この日もまた拝殿前にて男達は宮司からお祓いを受け、その後は酒を飲み囃子唄を唄う、前日と同様の有様が繰り広げられる。

この日もまた3時頃に、地区内を一周して来た神事舞の一行が、母親に手を引かれた来年少入学予定の子供達の稚児行列を従えて境内に入って来る。この行列は、華の周りで唄う人々の間を練りながら、境内を右回りに3回回り、拝殿前にて神事舞を奉納する。

これが終わると祭りはいよいよ興奮の度合を増して来る。華を奉納する人々は、形を整えるため垂れ竹の端を結んでいた紐を切って垂れ竹をバラバラにする。この作業が始まると、それまで和やかであった境内の中に、緊張感が漂い始める。この時サイトリ竹を伝

わって、垂れ竹の隙間から若者が一人輪の内側に入り込み、スポの上に立ってカラクリを下ろす。また自分達のための華の付いた垂れ竹も、前もって一部折り取って下ろし、別にしておく。

境内のざわめきが大きくなる中、次にはいわゆるモチマキの準備に取り掛かり、撒くものを詰めた段ボール箱を縄に結んでスポの中に引き上げる。用意の出来た華から撒き始めるが、文房具、菓子、インスタント・ラーメン、箱入りのティッシュ・ペーパーなどが紙吹雪などと共に撒かれると、境内を埋めた人の波が右へ左へと大きく揺れる。

こうして興奮の度合の高まった境内では、いよいよクライマックスを迎える。ここでも抽選をして華を倒す順番が確定すると、全ての華は固定していた縄を解かれて、社殿の周りから離れた場所へ移動し、男達は囃子唄を唄いながら順番が来るのを待つ。歌声も次第に大きくなる中、次々と華が倒され、そのたびに境内を埋めた人々が華を取りに殺到する。



<写真-3>華を待ちかまえる人々の前に倒す

「区の華」は、伝統的に最後に倒されることになっており、この華の番が来た時には、すでに終わった自由参加の華に出た地区内の人々も手助けに駆けつけ、「ヨッサ、ヨッサ」のかけ声と共に、華は社殿を右回りに5回廻った。

廻る回数3回もしくは5回とされており、4回廻ることは死を連想させることから避けられている。最後になると、かけ声に合わせてスピードも増し、華は待ちかまえている参詣者の前に勢い良く投げ込まれる。集まった人々は先を争って突進し、競って竹を折り取ろうとする。これを持ち帰り、鴨居などに掛けて家のお守りとするためである。そのような参詣者の必死の行動の傍らでは、「区の華」を奉納した男達の間で「バンザイ、バンザイ」の声と共に、握手を交わす姿が見られる。この瞬間、この年の「神事華」は終わりを告げたのである。

垂れ竹の折り取られた華の残骸を肩に、男達はハナヤドへと引き揚げる。日が暮れて暗くなった帰途、地区の酒屋の前では店の方から缶ビールが振舞われ、店の前の路上においては、未だ興奮覚めやらないままに囃子唄が唄われる。

ハナヤドに帰ると、すぐに直会が始まる。実行委員長であるハナヤドの主人の挨拶・乾杯に引き続き、自由な雰囲気酒宴が催される。女達も同じ部屋の傍らに集まって、飲食を共にする。軽い冗談や祭りを振り返っての話が進む中、歌も次々に飛び出し、和やかなうちに苦勞を共にした人々同士の慰勞が行なわれる。

翌10月20日には、役員などにより浜で神事華の残骸が焼却される。その後「花開き」と呼ばれる地区全体の直会が開催されることで、祭りは完全に終わりを告げることとなる。出来るだけ早い内に行うことが望ましいが、それまでに会計処理が終了していなければならぬために多少時間がかかり、また勤め人が多くなっていることも勘案して、10月最終の土曜日に成る可能性が高い。この年は10月31

日の土曜日に、この年「区の華」奉納に参加した地区の人々40人以上が集まって、公民館で行なわれた。

VI. 若干の考察

— むすびに代えて —

以上昭和62年の差海の「神事華」を、「区の華」奉納にかかわる人々の動きに着目して記述した。このことから明らかになる点をまとめることで、本稿のむすびとしたい。

見てきたことからわかるように、二日間にわたって繰り広げられるはなやかな「祭礼」へ向け、担当地区の人々は9月初め頃からその準備を始めていた。この間の地区の人々の負担は、有形・無形を合わせ、多様な形で担われていたことは想像に難くない。資金面については、各戸一律に4,500円の負担が義務づけられていたし、労働力についてもその折々に広く求められていたのである。

しかし準備の諸段階に、よそ者として観察していた筆者の目からは、この地区ではそれぞれの〈都合〉に応じた好ましい協力関係が成立していたものと思われる。その〈都合〉というのは、例えば職場の事情のような、個人の置かれている社会的関係に基づくものによる場合もあれば、性別や年齢に帰因する個人の能力に基づく場合も見られる。特に後者については、個人個人がその力に応じた仕事を担当し、能力に応じた作業の分業化が自然な形でなされていたように思われる。「区の華」の場合は、他の華と異なって、その参加決定が個人レベルの選択で行なわれているのではなく、ローテーションに基づいた「担当地区」という、実質的には非選択的な〈地縁〉に基づく問題として、家レベルでの参加が求められている。それが故に家の〈都合〉

で出てきた老若男女が、入り乱れて祭りの準備に向かう点はその特色となっているわけである。そのようなメンバー構成の多様性を正当なものとする原理が、あらゆる作業についていわれる〈都合〉ということになるものと思われる。

5年に1度回って来るということは、必ずしも意識されてはいなくとも、この年出される他の華、今まで他地区の出した「区の華」に負けずに立派な華を奉納しようとする対抗意識が生じるのも人情であろう。確かに境内に複数の華が並べられた時点で、年をとった人々の間から、それぞれの華の出来具合についての評価を下す声が聞こえるとなるとなさらである。それが故に自分達のかかわった華の制作が一段落した18日の昼前、気になるその出来具合を一目見ようと、多くの人が集まって来たわけである。華を遠巻きにする人々は、皆満足気な表情をしていながらも、無言のうちにこれを眺めていたわけであるが、その背後には、人々をつなぐ強力な我々意識 (we-feeling) があったものと考えることが出来る。つまり対抗意識の結果として、華の奉納が地区の人々を一つにまとめて行く役割を果していたと見ることが出来るわけである。この点は、通勤距離の拡大などにより、地区内の近隣同士のつながりが疎になっている点が指摘され、さらには産業構造の変化に伴う地区の共同性の崩壊を危惧する声も聞かれる現在の差海区において、重要な意味を持つものとなろう。

またさらにこの年担当した地区は、婿入りした人が非常に多い所であったが、このよう¹³⁾な人々に対しても、神事華奉納は有益に働いていたものと思われる。つまり一ヶ月余に及ぶ祭りの準備期間を通じて、地区の伝統的な

生活様式を身に付けて行く機会が増える結果、そのような人々の地区の一員としてのアイデンティティ確立の上でも、大きな機会を提供しているものと考えられよう。これらをまとめていうなら、「区の華」の奉納は地区の人々の統合機能として作用していた、ということが出来るものと思われる。

では次に、この祭りを一つのドラマのストーリーとして見ていく場合、とりわけ奉納される華の意味はどのように位置づけることができるのだろうか。

まず思い返してみると、華は制作過程にあるうちから、普通のモノとは違った扱いがなされていた。本文中煩雑になるのですべてには記さなかったが、作業開始前には大抵御神酒が振舞われ、お清めがなされていたのである。だから遅刻をしてこれをしないで作業に加わろうとした人に対しては、御神酒を飲むよう必ず指示が見られたのである。材料を加工し組み立てていく制作途中の華は、聖性を持つことを示す何物も持たないはずであるが、実際には、後でこれが神社に奉納されるということに基づいて、これに対しては聖性を持つものに準じた扱いがなされているものと考えられる。従ってそこで使われる化粧縄は、神前に用いられる注連縄と同様、左縄でなったものが使われることになっていたし、またスポに芯竹を打ち込む際にも、そのうち込む部分に御神酒がかけられ、お清めがなされていたわけである。

では華を奉納する意味はどこにあるのだろうか。この点、人々の間で誰もが共通理解を持っているというわけではないが、よく聞かれるところを記すと次のようになる。つまり先にも触れたように、華は聖性を持ったものに準ずる扱いを受けていたが、境内に登り、

宮司からお祓いを受けた後にカラクリをつけることにより、神の居着く依り代となるものと考えられているのである。つまり奉納する華が後刻神の依代となるからこそ、その制作過程においても、清めが必要になるものと考えられるわけである。神がそこに宿るのがカラクリをつけた時点なのか、一晚境内で明かす間なのか、またそこに宿られる神がどなたであるかといったことになると、厳密な回答を得ることはなかなか難しいが、このような観念は折口信夫の「髭籠の話」の指摘にも見られることである。¹⁴⁾

そのように見て来ると、境内を埋めた人々の前に華を倒す、この祭りのクライマックスは重要な意味を持って来る。つまり人々が先を争って垂れ竹を取り合うことは、神の依代となった竹を取るということになるからである。当該地域では、この時に取った竹を家の鴨居などに掛けておき、五穀豊穡、家内安全、無病息災などのための、家のお守りとする慣習が広く見られる。それが故に、祭り参加者の大半は本殿内の「神事」に参加することがなくても、依代を入手せんがために、祭りのクライマックスに境内に集まって来る結果を生んでいるものと思われる。即ち、神事華が例大祭に取り入れられるようになった経緯はいざ知らず、祭りに集まって来る人々の大半が現在では「神事」よりも華に注目して、祭りに参加しているものといっても過言ではない状況が広がられているのである。

しかしこうして見て来ると、神社の「神事」ではなくて、氏子によって担われている「祭礼」の一形態として位置づけられる華に対し、人々は神の臨場を見ていることになる。本稿の冒頭で、「祭礼」が「神事」を喰うといったが、現在行なわれている差海の「神事華」に

おいては、たとえ一部であるとしても、「祭礼」が実質的な「神事」の機能を果たしていると思われることが出来るように思われる。

筆者はこれまで昭和61年と62年の2回、差海の神事華を見る機会に恵まれた。最初の時は、10月19日午後、佐志武神社境内で繰り広げられた祭りのクライマックスを、VTRや写真の撮影をしながらの観察であった。この時はただただ奉納されていた華の美しさに圧倒され、境内の6本の華の下で繰り広げられる囃子唄の響きに、振舞われる酒のせいばかりではなく、すっかり酔ってしまった。引続き翌年には、「区の華」を中心にして神事華の作成段階から出来るだけ参加し、時には参与観察も行なって記録に務めた。

予定ではさらに63年の祭りの際にも調査を続行して、前年よりもマクロな視点からこの祭りの全体像を捉える予定であった。しかし9月中旬以来の天皇陛下のご不調に起因する、全国的な祭り自粛のご多分に漏れず、この祭りも大幅に簡略化して実施されることとなった。そして「祭礼」としての華の奉納は、準備に取り掛かっていたにもかかわらず、最終判断を任された担当地区の判断で取りやめとなってしまった。

そのため本稿は、あくまで昭和62年に行なわれた「区の華」の奉納過程を中心に見た「神事華」分析ということになってしまった。従って今回深く言及できなかった、もう少しマクロな視点からの祭り分析は今後の課題ということになる。その意味からも、本稿は差海の「神事華」に関する調査の、中間報告であることをお断りしておく。

なお本稿をまとめるに際しては、佐志武神社の武田隆昭宮司をはじめ、「区の華」の奉納

にあたった地下の北組・中組・上空を中心に
した差海地区の多くの方々のお世話になっ
たりわけ小村正明氏、中尾弘氏、湖陵町教育
委員会の梶谷尚武氏には、格別のお世話に
なった。また筆者の所属する教育学部社会科
研究室の学生であった倉橋哲朗、福間勉、山
根伸一、岩崎厚志の諸君からは、資料収集や
VTR撮影などで多大な協力を得た。末筆な
がら篤くお礼申し上げたい。

最後に、この報告は昭和61年度から3年間
にわたり行なわれた、文部省科学研究費補助
金 [一般研究(A)「古代出雲文化の展開に関す
る総合的研究」(研究代表：田中義昭島根大学
法文学部教授)]の援助で行なった調査によっ
て得られた資料の一部を使用したことを付記
しておく。

註1) 藺田 稔「祭一表象の構造一」、田丸徳善他編
『日本人の宗教II 儀礼の構造』, 佼成出版社,
1972, pp.238~288.

2) 桜井徳太郎「マツリの原点——その宗教民俗
学的考察——」, 『聖心女子大キリスト教文化研
究所紀要』第3号, 1975. ただしここでは『日
本祭祀研究集成』第2巻, 名著出版, 1978. 所
収のものによった。

3) 祭りを1つのドラマとして見て行く視点は、
研究者が意識しているか否かは別として、これ
までにも見られた。折口信夫の「髭籠の話」や
柳田國男の『日本の祭』にも、その観点が窺え
ることを柳川啓一は指摘している。柳川啓一「祭
祀研究の現状と課題」, 『日本祭祀研究集成』第
2巻, 名著出版, 1978, pp.3~22. 参照。

4) ここでは千葉正士の用法を参考に、整理して
みた。千葉は機能構造的な観点より、神社の祭
りを神事、祭礼・日常奉仕・維持管理から成る
ものとまとめる。千葉正士「祭りの法社会学」,

弘文堂, 1970, pp.24~26.

- 5) 前者にあたる例としては、12年に一度行なわ
れる松江のホーランエンヤが、また後者の例と
しては島根半島の各所でみられる大餅さんがあ
げられよう。ホーランエンヤについては、以前
まとめたことがある。鈴木岩弓「松江のホーラ
ンエンヤ——都市における伝統的祭りの実態
——」, 『山陰地域研究(伝統文化)』第2号, 島
根大学, 1986.
- 6) 本論においては、祭りの名称を指す場合は「神
事華」、奉納物を指す場合には神事華あるいは
華、奉納物につけられる造花をハナと表記して
区別する。
- 7) 山口 寛「出雲・石見の祭り花について」, 『山
陰民俗』第31号, 山陰民俗学会, 1978.
- 8) 現在湖陵町教育委員会で保管してあるもの、
コピーを参考にした。
- 9) 三原 亮『西濱人の村外発展に関する研究』,
島根縣立今市商業學校興亜経済研究班, 1943.
ちなみに同書に掲載されている、昭和17年当時
の出稼ぎ状況は以下ようになる。(同書p.
137より)

地区 職種	大 池		板 津		差 海	
	男	女	男	女	男	女
商 業	110	25	45	14	25	11
工 業	159	51	66	20	161	94
鉱 業	28	2	23	2	151	20
その他	44	41	18	19	34	24
合 計	341	119	152	55	371	149
	460		207		520	

- 10) 黒沢長尚編『雲陽誌』, 歴史図書社, 1976, p.
692. ちなみに『雲陽誌』によると、当時の祭礼
は9月朔日であった。
- 11) 藤脇久稔「シシキト」, 『伝承』13号, 山陰民
俗学会, 1964, pp.16~19. この論文は、本論で

扱った「神事華」を、当時いわれていたという「シシキト」という名称でまとめたものである。ここに書かれた内容は、今日の姿と大筋は変わらないものの、興味深い指摘がなされている。それらの点に関する考察は、稿を改めることとしたい。

- 12) 神事舞というのは、この地で古くから行なわれていた、国譲り神話を模した舞である。現在では氏子の間で、佐志武神社神事保存会を結成して継承されている。毎年祭りの10月18、19の両日に、拝殿前で奉納される。
- 13) この指摘は良くなされるが、正確な統計資料は見えていない。しかしハナヤドを出発する際に撮った記念写真に写る20人の男のうち、11人が婿であった。
- 14) 折口信夫は、だんじりの車の上に据えられて

いる髭籠の由来を考察する中で、神が祭りの際に依代を通じて天から降りて来ることを述べている。折口信夫「髭籠の話」、『郷土研究』、3-2・3、4-9、1915（ここでは『折口信夫全集』第17巻所収のものによった。）またそれに続く「盆踊りと祭屋臺と」の中で、出雲の国神門郡須佐神社で行なわれている切明神事に言及し、「長い竿の先に、裂いた竹を放射して、其に御祖師花風の紙花をつけたもの」を竿持ちが支えるのは、神が直ちに神社に降りない証拠となるとして取り上げている。折口信夫「盆踊りと祭屋臺と」、『大阪朝日新聞』、1915（これもまた『折口信夫全集』第17巻所収のものによった。）この祭りで用いられる花は「祭り花」と呼ばれており、この指摘は差海の神事華を考察する上でも参考になる。